

## IFERI 共同セミナー「比較文学・思想史・日本文学—福田恆存研究の視角を巡って—」

### 本企画の概要

本セミナーは、趣旨の共有、参加者の研究発表、指定討論者からのコメント、フロアからの質疑、および総合討論から成る。はじめに、これまでの福田研究がどのような視点から、何を論じてきたのかを確認することで、福田研究の「現在」の方向性を確認した。その上で、福田研究を中心とした、研究発表、指定討論者からのコメント、および質疑を行った。さらに、思想史、比較文学、日本近現代文学など発表者それぞれの研究領域の違いを見出しながら、福田研究を巡る問題点と新たなアプローチについて、「昭和期日本と福田恆存」と題した、総合討論を実施した。

### 趣旨説明

古田高史氏より、本セミナー開催の趣旨、発表者の紹介がなされた。まず、現在までの福田研究、評伝は、(1) 福田の「戦前」、「戦中」、「戦後初期」、(2) 福田の英文学受容（シェイクスピアと D・H・ロレンス）、(3) 福田による「戦後批評」（芸術論・国語論・保守論・進歩派批判）という 3 つの視点にまとめられることが確認された。次に、Robert Tierney 氏（イリノイ大学・東アジア言語文化研究科・准教授、筑波大学外国人特別研究員）、浜崎洋介氏（東京工業大学大学院・社会理工学研究科・価値システム専攻・大学院生）、古田高史氏（筑波大学大学院・人文社会科学研究科・国際日本研究専攻・大学院生、IFERI 第 2 期プログラム生）という 3 名の発表者の発表概要、これまでの研究が紹介された。ここでは、古田氏は、「戦前」、「戦中」から「戦後初期」の福田による作家論から読み取れる福田の「原点」を取り上げ、浜崎氏は、「1950 年」前後における福田の〈批評＝精神〉から〈芸術＝行為〉への「転機」の意味に迫り、Tierney 氏は、〈芸術＝行為〉という思想の具体的展開として、福田のジュリアスシーザー翻訳・演出の問題を取り上げることが確認された。

### 研究発表 I

#### 福田恆存の「原点」—福田の初期作家論における「自己」「表現」—・古田高史氏 発表概要

はじめに、終戦直後、福田が展開した「政治と文学」論を通して、D.H.ロレンス『黙示録論』(D.H.Lawrence : Apocalypse and the writings on revelation, 1932) に示された、「集団的自我」と「個人的自我」の対立と均衡という議論が、福田による「批評」の「原点」であったことが指摘された。その上で、「集団的自我」と「個人的自我」の問題が、「戦前・戦中」の福田による「作家論」の中にどのように表れているのかについて、「横光利一と『作家の秘密』」(『行動文学』、2 巻 1 号、1937 年 1 月)、「嘉村礒多論」(『作家精神』、4 巻 2 号、1939 年 3 月)、「芥川龍之介論 (序説)」という 3 つの「作家論」(『作家精神』、6 巻 6 号、1941 年 6 月) を取り上げることで検討された。具体的には、以下のような点が指摘された。(1) 横光論での、横光作品における「自己優越感」に対する批判が、『黙示録論』の「個人主義」批判と重なっている。(2) 嘉村論で、福田は、「実生活」と「作品」の、二

元的なあり方に嘉村作品の「虚構」性をみている。その上で、嘉村作品は「虚構」であることにより、水平的・相対的「現実」（＝「実生活」）では成立しえない「厳然たる自我」を示したものだとして、福田は評価している。ここで、嘉村論の「実生活」／「作品」という発想の背景として、『黙示録論』での「集団的自我」／「個人的自我」という「二律背反」が考えられる。(3) 芥川論では、芥川の「比喩」を、水平的・相対的「我の対立」は、支配か被支配という一元的な解決は避けられないという前提のもとで、「現実」（＝「己」を「拒絶」する「外部」）に「己」を託す「方法」であると、福田は規定している。ここで、「比喩」は、「現実」と「己」の間に生じる「我の対立」をつなぐ「迂路」として機能する。こうした「迂路」としての「比喩」という発想は、『黙示録論』の、「有機的な結合」という主張の、福田による具体的展開といえる。以上の3点から、「戦前・戦中」の福田の「作家論」には、「自我のうちにひそむ」、「集団的自我」と「個人的自我」の対立と均衡という問題が含まれていることが指摘された。

#### コメント

浜崎氏より、本発表で触れられた「戦前・戦中」の福田における「自我のうちにひそむ」、「集団的自我」／「個人的自我」の問題について、「戦後」の福田においては、「自我のうち」に留まらず、『黙示録論』での「全体性 wholeness」へと展開していった点が補足された（詳しくは、浜崎氏の発表概要参照）。この点に対して、Tierney氏から、福田の「演劇」を考える際、浜崎氏の指摘した「全体性」という『黙示録論』の読み方は興味深いとの指摘があった。

## 研究発表Ⅱ

### 福田恆存の「転機」―〈批評＝精神〉から〈芸術＝行為〉へ―・浜崎洋介氏

#### 発表概要

浜崎氏の発表では、まず、1950年を、福田が、〈批評＝精神〉から身を引き、〈芸術＝行為〉へと向かう「転機」として位置づけた。その際、福田が自らの手掛かりとしたのは、戦前から、その影響を受け続けてきたD・H・ロレンス『黙示録論』での〈全体＝自然〉概念であったことが指摘された。この点を踏まえて、浜崎氏の報告では、終戦直後の文芸批評から『否定の精神』（銀座出版社、1949年）に至るまで、そして『芸術とはなにか』（要書房、1950年）への飛躍、さらに、『人間・この劇的なもの』（『新潮』、52巻7号～53巻5号、1955年7月～1956年5月）の論理が示された。具体的には、以下の点が取り上げられた。(1) 福田の「一匹と九十九匹と一ひとつの反時代的考察」（『思索』、5号、1947年3月）での、「一匹」を救う「文学」という発想は、一見、暴力＝政治から個人＝文学を守ろうとするリベラルな言葉として響く。その点で、福田の主張は、『近代文学』派やマチネ・ポエティック、戦後啓蒙主義者と共通した〈人間＝文学〉主義路線とされる。しかし、福田には、「人間」の先にあるものの視線がある点で、上述の路線とは区別される。ここで、合理的〈社会改良＝啓蒙〉では一般化し得ず、そこから零れ落ちる〈この私〉への視線、

自己／他者、個人／集団という地平そのものを可能にする「全体性 wholeness」への視線という、終戦直後の福田が持った2つの方向性が指摘された。(2) 福田は、『否定の精神』において、〈批評＝精神〉の「いつまでもくりかへされる自己回帰の運動」を見届けた後、〈批評＝精神〉の背後にある〈芸術＝行為〉へと視線を移した。『芸術とはなにか』で、芸術家と作品、作品と鑑賞者との「あひだ」に成立する〈行為＝美〉が主題化されたことから、こうした「転機」の内実が示された。(3) 『人間・この劇的なもの』でのハムレット論を通して、福田の「全体」とは何か、についての考察が示された。その際、〈全体＝必然〉を対象化する、「浪漫主義」と「全体主義」という二つの方向性に対する福田の批判に言及した上で、〈部分＝偶然〉に徹した行為だけが、〈全体＝必然〉のリアリティをもたらすという逆説が示された。(4) 結論として、福田の言う「全体」を、生と死という〈自然誌的事実＝全体〉を信頼し、その〈リズム＝型〉に倣う劇形式に求めた。その上で、「型」による「味はひ」を、今、ここに伝え、そのリアリティを統べている「歴史」や「言葉」への福田の視線が示された。

#### コメント

古田氏は、浜崎氏の示した、福田の「転機」という捉え方に同意した上で、『芸術とはなにか』に示された、演劇の主体を観客とする発想は、「リアリズムと批評の問題」(1936年)で、「作家」が「読者」を顧みず、「自己主張」に耽ることにより生じる「作家」と「読者」の「乖離」を批判する、福田の姿勢と共通するのではないか、との指摘をなした。その上で、こうした「読者」、「観客」への福田の視線は、一般的に「民衆」とは「断絶」したとされる福田が、「民衆」の側に立とうとした意識の表れではないか、という意見を述べた。

Tierney氏は、福田の「全体＝自然」と、パスカルの「第二の自然」の類似を指摘した。さらに、福田の「全体＝自然」とサルトルの「実存主義」の違い、福田の新劇運動についてなど、総合討論での重要な論点が提示された。

#### 研究発表Ⅲ

##### The Politics of Translation and the Translation of Politics

: Tsubouchi, Fukuda and *Julius Caesar* · Robert Tierney

#### 発表概要

Tierney氏の発表では、坪内逍遙のジュリアスシーザー翻訳・上演と1880年代の自由民権運動とのつながり、福田恆存の、ジュリアスシーザー翻訳・上演と1960年代の安保運動との関係を比較しながら、両者における、「文学」と「政治」のありようについて、考察が示された。まず、坪内は、自身の翻訳に直接的に同時代の政治状況を盛り込んだのに対して、福田は、ジュリアスシーザー自身の内容を通じて、同時代の政治を見ているといった指摘がなされた。その上で、具体的には以下の点が示された。(1) 坪内が『該撒奇談・自由太刀餘波鋭鋒』(東洋館書店、1884年)を発表した、1884年前後と福田がジュリアス

シーザーを翻訳、上演した、1960年前後の歴史的、政治的状況。(2) 福田による、シェイクスピア作品の翻訳、上演(1955年)を、新劇運動の点から検討した。その上で、福田の「政治主義の悪」(読売新聞、1960年8月15日～8月17日)から、福田の安保運動に対する見方が確認された。ここで、演劇と政治状況の連関が示唆された。(3) 坪内の、『該撒奇談』では、「天賦の自由」など、ジュリアスシーザーにはない部分が付け加えられている上に、「語り手」が、劇に対する解説を加えている。それに対して、福田の、ジュリアスシーザーでは、坪内のような変更は見られない。福田は、演出や解題での4幕3場の重要性の指摘を通して、自身のジュリアスシーザーの読み方を示している。(4) 坪内と福田のジュリアスシーザー翻訳、上演の違いは、80年という時代の変化の制約を受けている。その上で、坪内が、自身の『該撒奇談』に直接的に同時代の政治状況を盛り込んだのに対して、福田が、ジュリアスシーザーの多面性を通して、同時代の状況を見ていることが指摘された。つまり、坪内と福田は、対照的な方法によってはあるが、両者ともに、ジュリアスシーザーは、鏡のような役割を果たしている。

## コメント

浜崎氏より、福田による、ジュリアスシーザー解題にある「精神の政治学」という言葉について説明がなされた。浜崎氏は、「精神の政治学」という用語は、「近代の宿命」(『文学会議』、1輯、1947年4月)で用いられたものではないかと指摘した。その上で、「近代の宿命」では、水平的・相対的「現実」を生きる「個人」が、垂直的・絶対的「神」に通じえないことで生じる矛盾が語られていることが紹介された。

古田氏からは、福田による解題について、福田が、A.C.ブラッドレーに言及しながら、4幕3場に対して、福田自身の解釈をしている点が指摘された。この点は、福田が、「マクベスについて—ブラッドレー教授に」(『批評』、9巻1号、1947年)でも、同じく、A.C.ブラッドレーに寄り添いながら、福田自身の「マクベス」観を提示していることと合わせて、考察の余地があるのではないかと、という指摘がなされた。

## 総合討論

### 昭和期日本と福田恆存

総合討論では、はじめに、古田氏の示した、「文学者」のうちの「集団的自我」と「個人的自我」の対立と均衡の問題、浜崎氏の検討した、「集団的自我」／「個人的自我」という地平そのものを可能にする「全体性 wholeness」の問題、さらには、Tierney 氏の取り上げた「精神の政治学」の問題が、連続線上にあることが確認された。その上で、それぞれの発表から見出された論点について、確認が行われた。主な論点は、以下のとおりである。(1) 福田のロレンス受容について、(2) 福田と時代状況との関係、(3) 「世界文学」と福田

### 総括

本セミナーでは、「戦前」、「戦中」から「戦後初期」の福田による作家論から読み取れる福田の「原点」、「1950年」前後における福田の〈批評＝精神〉から〈芸術＝行為〉への「転機」、〈芸術＝行為〉という思想の具体的展開としての、福田による、ジュリアスシーザー翻訳・演出の問題を取り上げられた。その結果は、本報告書からも伺えるように、具体的な時代状況の中での様々な問題との関係を含めて検討されるべき問題であった。福田の残した「批評」は、昭和10年代の私小説言説、戦後第一次「政治と文学」論争、新劇運動といった、具体的な時代状況の中で、「ポレミック」なものとなり、これまで、福田に固有な問題は見逃されてきた。例えば、浜崎氏の触れた、戦後初期の福田が、『近代文学』派やマチネ・ポエティック、戦後啓蒙主義者と共通した〈人間＝文学〉主義路線に回収されてしまうことは、その一例である。しかしながら、Tierney 氏、浜崎氏、古田氏の発表から見えてくるように、福田の残した「批評」は、同時代の状況と関わりながらも、福田自身の個的課題が表れている。福田研究は、この点をどのように扱うのか、という、「現在」の課題が確認され、それぞれの研究視角が示されたことに、本セミナーの成果が確認できる。今後は、福田研究の立場に限らず、近代文学、思想史、シェイクスピア批評といったより広い視点から、福田の個的課題について検討がなされる機会を期待しつつ、本セミナーは閉会した。